2020.4.23

大草

読書メモ

130. 五島茂　坂本慶一共著「世界の名著42」中央公論社（1980.3））

131. 石井洋次郎「科学から空想へ(よみがえるフーリエ)」藤原書店（2009.4）

132. 清水正徳「働くことの意味」岩波書店（1982.4）

133. 清水正徳「人間疎外論」紀伊国屋書店（1982.2）

**＜五島茂　坂本慶一「世界の名著42：ユートピア社会主義の思想家たち」から＞**

・マルクスとエンゲルスは共産党宣言において、ユートピア社会主義者または共産主義者（サン・シモン、フーリエ、オウエン）に対して3つの点で批判している。

第一:彼らはプロレタリアートの独自の歴史的役割を認めることができなかった。というのは彼らはプロレタリアートの解放のための物質的諸条件をほとんど全く見いだすことができなかったからである。

第二:空想的社会主義者たちはその没階級的性格によって、支配階級の善意に期待し、革命行動を非難する。また、彼らは労働者のあらゆる政治運動に憤激を持って対立する。

第三:彼らの議論は、資本主義の発展とともに破産するにもかかわらず、歴史に逆行して社会的ユートピアを建設しようとする。したがって階級闘争が発展し、形成するにつれて、それだけ階級闘争に対するこの空想的超越、階級闘争のこの空想的克服は、一切の実際的価値を、一切の理論的正当さを失う。

・解説書の「サン・シモン学説解義」（1830年）は次のようにまとめている。

「もとよりことの起こりがどうであろうとも、その同胞による人間の搾取は、過去の最も特徴的な現象である。今日まで人間が人間を搾取した。主人は奴隷を、貴族は平民を、領主は農奴を、地主は小作人を、有閑者は勤労者を、これこそ現代に至るまでの人類の進歩の歴史である。」20年後に共産党宣言はこう書く。「今日までのあらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史である。自由民と奴隷、都市貴族と平民、領主と農奴、ギルドの親方と職人、要するに圧制者と被圧制者とは、常に互いに対立し、ときには喑喑のうちに、ときには公然と、不断の闘争を行ってきた。」

・フーリエの階級的立場は、不鮮明である。彼は文明社会に対して鋭く激しい批判を行い、「豊富の中の貧困」から人類を解放しようと企図した。彼の社会理論は、人間の諸情念を解放する調和社会の建設にあったから、初めから人類の総体を問題にしていて、特に労働者階級のみに視点を固定していない。相続財産についての若干の修正のほか、基本的に彼は私有財産制を情念の満足にとって必要なものとみなした。フーリエのファランジュ（協同体）における社会的余剰の配分は、資本に対して12分の4で、労働への配分12分の5よりは少ないが、才能への12分の3よりは大きい。革命と闘争を嫌悪するフーリエは、一貫して階級調和の立場を主張した。したがって彼は貧民階級の境遇改善に強い関心を持っていたとは言え、人間の諸情念の全面的解放という社会理想の当然の結果として、労働者階級の立場を代弁はしていても、それのみを代表するものでは無い。それゆえマルクス、エンゲルスによるユートピア社会主義批判は、フーリエに対して最も厳しい。

・現代の高度産業社会において、人間的「生」は息絶え、人々が静止した物質的状態へと接近していく。ユートピアを放棄した「科学的」社会主義体制もまた、生産力増大をひたすら追求する社会である限り人間的「生」の本質である自由と創造の精神は抹殺されていく。ソルジェニーツィンのように。もちろん生産力を高めることが悪だというのではない。問題はそれを実現する方法であり、それによって実現される社会と人間のあり方である。

・フーリエのいうように、人間的「生」を表現する情念の解放が、同時に高い生産力を結果するような社会、遊びと労働の区別をもはや必要としなくなるような自由な社会を夢想することができる人々がいる限り、現代の高度産業社会における人間的危機を止揚する可能性は、なお人類の手元に残されていると言えないだろうか。

・フーリエの思想は、オウエン、サン・シモンに比べてはるかに多くの謎に包まれており、その思想の全貌は、彼の母国フランスにおいてもまだ明らかにされていない。彼については、協同組合、労働運動、婦人解放運動、コミュニティー創設運動などに与えた直接的影響のほかに、次のような諸問題がクローズアップされてくる。宇宙論的スケールで展開されているその独自の歴史観、フロイトに先立つ人間の情念についての心理学的分析、とりわけセックスをめぐる人間と社会の問題、現代文明の所産としての人間疎外の実証的な描写、農業技術論や食生活の、あるいは農業労働組織論を踏まえた自由管理的農業コミューン論、さらに労働と遊びの統合の理論や教育論、社会医学論、社会資本論、都市計画論の展開など、フーリエの提起する諸問題は目のくらむほど多彩であり、その着想の奇抜さにはただ驚嘆するのみである。それらは現代社会の考察、並びに未来社会の構想にあたって、今日もなお新鮮で有効なビジョンを提供しているように思われる。

・最後に科学とユートピアについて論じているルネ・デュポスの「理性という名の怪物」の1節を引用することによって、ユートピア社会主義が現代の我々に新しい社会、新しい文明を築く思想的触媒となりうることを提唱してむすびとしたい。「ユートピアの夢は、現実の素材つまり経験かつ科学的な道具や所産を文明に転化する触媒であり、その文明とは、人間精神のなかに最初は一心象として発展し、やがて具体化するものである。ユートピアは、物質に生命の息を吹き込む精霊である。」

＜フーリエ著：産業的協同社会的新世界＞

我々の地球と同じく他の天体においても、人類は虚偽の、そして分散細分化された機構のなかで、未開、家長制、野蛮、文明という4つの期劃を含むほぼ100世代を過ごし、次の2条件を満たさなければならない。

1.大規模産業、高度の科学、および芸術を作り出すこと。これらの発条は、貧困および無知とは相容れない協同社会体制の確立に必要であるから。

2.この協同社会機構、つまり分散細分化とは対照的な産業的新世界を発見すること、

という2つの条件を人類が満たすまでにまた明日まで、そこで沈滞することを余儀なくされている。

首尾よくそうするために、人々は極めて数多くの方途を持っていたのにそれが全てを、とりわけ、今日物質引力の計算についてのニュートンの成功が指示した情念引力の計算を等閑に付してきているのである。

第一の条件はかなり十分に満たされている。われわれは久しい以前から、産業、科学および芸術をかなりの段階にまで押し上げている。アテナイ人ですら、奴隷制を年払い償還金によって支払われるべき買い戻し制によって置き換えていたならば、協同社会制度を樹立することができたであろう。

しかし、第二の条件は少しも満たされていない。産業研究し始めてより100年この方、分散細分化や小規模家政とは対照的な機構を発見しようとは夢にも思ってこなかった。家庭的職務と農業的職務をもつ結合的産業制度の探求が提案されたことさえない。つまらぬ論争、冗長な著作に対して数百フランの商品が約束されているのに、自然的協同社会の方法に対しても小さな勲章すら約束されていない。

・協同社会制度においては、労働は、今日の祝宴や芝居と同じ位に魅力的なものでなければならないだろう。

〈フーリエの思想〉

フーリエは、アイザックニュートンが物質間の引力に関して発見した法則、つまり万有引力の法則をさらに情念の面にまで広め、情念引力およびその法則の発見に至った、というのである。言い換えると、社会的運動や情念運動（人間の諸活動）には、情念引力による法則性があることを発見したというのである。

フーリエは、宇宙の全運動を、物質的、有機的、動物的、および社会運動の4種類に分類する。これは4種類の運動にはアナロジーと統一性とが存在しており、ニュートンの発見した物質運動の法則に続いて社会運動の法則を、またそれを司る情念引力の法則を発見することによって、あらゆる運動の法則が解明されるとフーリエは考えたのである。

〈フーリエ曰く〉

「引力は人間の原動力なのであり、宇宙と人間と動かすために神が用いている媒介物なのである。だから情念についても物質についてと同様に、引力を全体として研究することによってしか、人間、宇宙および神を研究することはできないのである。

ついに不注意による損失は埋め合わされ、情念引力の計算が発見され、そして世界を即座に幸福の境遇へと移行することができる。こうした際には、その理論が正しいのかどうかを証明することにのみ専念すべきであって、その形式について発見者に言いがかりをつけるべきではない。検討しなければならないのはその根底なのである。協同社会について法螺を吹く人間に対して何と優遇がなされてきたことか。真の発見者は正義より外は要求しない。」

**＜石井洋次郎「科学から空想へ(よみがえるフーリエ)」から＞**

マルクス、エンゲルスによってフーリエは空想的社会主義者の1人とされ長い間このレッテルが定着していたが、20世紀になってベンジャミン、ブルゾン、バルトなどが彼の著作の独創性に着目し、それぞれの観点から新たな読み直しを行っている。1967年には「愛の新世界」が初めて刊行され、再評価の機運が高まるきっかけとなった。

本書では、フーリエの代表的な著作の内容を吟味しながら、その思想的展開をたどっている。取り上げる書物は「四運動及び一般的運命の理論」、「家庭的農業的協同体概論(後に普遍的統一の理論と改題）」、「産業的協同社会的新世界」、そして死後出版された「愛の新世界」の4冊。そして、フーリエのユートピア構想が持ち得る思想的射程について言及しており、今日の私たちにとって「科学から空想へ」の可能性を考察している。

・無邪気なオプティミズムと言ってしまえばそれまでだが、ここでも個人の競合関係が労働意欲を昂進させる健全な契機として有効に機能するという展望が繰り返されていることが確認されよう。個別的な所帯から集団秩序へと移された子供たちは、「遊んでいるようなつもりで生産し、利益を上げる」というのだから、農業協同体においては最終的に遊戯と労働が一致する。つまり利益の追求と快楽への欲望が矛盾なく融合し、これによって集団全体の活力が漸進的に増大されるというのが、フーリエの描く理想社会の姿なのである。

・引力という用語はもちろんニュートンに由来しているが、フーリエは「物質界と精神界とに通ずる運動体系の統一」という観点からこれを「斥力」という反対概念とともに人間の様々な情念に拡大適用し、それらの間に相互作用する普遍的な力学としてとらえている。著者なりに敷衍すれば、人が愛しあったり憎みあったりするのは一般に定量的には計測できない感情的事象と考えられているが、実は物体同士の間に万有引力が働いているのと同様、人々の間にも目に見えない一定の「情念引力」（及び「情念斥力」）が働いているのであると同様、これが現在の不統一な世界を完全な上へと昇華させていく根本的な努力になるというわけだ。

この法則は四運動間のアナロジーを介して自然界、人間界のすべての領域に該当するものであり情念引力の発見によって人間は初めて自然の孕むさまざまな謎を解明し、歴史の新たな段階へと飛躍することができるとされる。

　フーリエが素描してみせる協同社会=正立した世界においては、あらゆる階級、あらゆる党派が満足させられることになるので、「そこでは哲学は夢見るだけにとどまっているあらゆる幸福、そのうち本当の自由、行動の統一性、富に到達する道となった真理と正義の支配といったものが実現されるのが見られるであろう。」単純素朴な理想主義と言ってしまえばそれだけの話だが、フーリエは大真面目に協同社会のもたらすであろう利点を次々と列挙してみせる。生産性の飛躍的な向上、盗難や詐欺の消滅、商業における競争の適正化、統一言語(基本的にはフランス語とされる）の採用による意思疎通の容易化、公共土木事業の進展、選挙の効率化、子供の境遇の改善、等々…。

・これほど多くの利点をもたらす神社会の発見が、なぜこれまで多くの優れた学者たちによってなされてこなかったのかという当然の疑問に対しては、道徳という障害が情念引力の研究を妨げてきたことが要因の1つとして挙げられている。私たちを突き動かす自然な衝動は個人レベルで見る限り悪への傾斜を排除できないので、その限りにおいては確かに「情念引力の不倶戴天の敵」である道徳と背反せざるを得ず、学者たちはこれを十分に認めることができなかった。しかし集団全体のレベルで計算すれば、むしろ衝動の効果は逆に美徳につながるものであるとフーリエはいう。彼の鍵概念である「情念引力」なるものは、個人と個人を引きつけ合う(あるいは斥けあう）断片的なベクトルとしてではなく、あくまでも多数の人間からなる協同体全体に偏在する集合的なエネルギーとして捉えなければならない。個別的な矛盾や葛藤は適正に組織された一定規模の集団生活の中ではおのずと解消されるというのが、フーリエの論理なのである。「引力は人間の原動力であり、神が宇宙と人間を動かすために用いる媒介物である。したがって引力をその全体において、情念についても物質についても同様に研究することによってしか、人間、宇宙、そして神を研究することができなかったのだ。」

＜科学から空想へ＞

「諸階級は区別しなければならない」と明言されていることからもうかがえるように、フーリエの思い描く新たな調和社会においては、富裕層から貧困層に至る連続的な階級性の存在がはっきり前提されている。貧富の差は集団のダイナミズムを確保するためにむしろ欠かせない要素であり、私有財産の否定による最終的な階級の消滅というビジョンは、彼の採るところではない。このことからもフーリエに貼られた「社会主義者」というレッテルが（空想的という限定つきであるとは言え）およそ的外れであることが改めて確認できる。

・フーリエの世界観は究極的に個人的欲望の解放と集合的秩序の維持を共存させ調和させることを目的とするものであり、その限りにおいて、まさに社会民主主義的な「共生」と「連帯」への道を確かに指し示しているからだ。

・フーリエにおいて、ユートピアは現世から逃れるものではないし、より優越的とみなされる価値体系に訴えることでも、ファンタスム（幻想）的な空間に逃避することでもない。それは世界を作り直すための手段なのである。

・私たちは思考の軸を180度回転させ、「空想から科学へ」から「科学から空想へ」と、歴史のベクトルを逆転させなければならない。こうして時間の彼方に向けてまっすぐに投射された「反歴史」の延長線上に、フはーリエは新たな相貌をまとってよみがえる。今こそフーリエを!

（大草メモ：科学的社会主義や共産主義が、現実の世界では破綻したことにより、空想的と排斥されてきたフーリエ・オーエン・サンシモンが脚光を浴びてきたことは興味深い。）

**＜清水正徳「働くことの意味」から＞**

・そもそも資本主義経済は、2つの面から労働の楽しさ(遊びの要素）を奪ったといえます。

第一は、人間関係が商品交換という物的関係に帰してゆくこと、さらに労働力商品の売り手と買い手という立場をさぐっていくことによって明らかにされた経済的階級性、これによって生きた人間同士の交流が喪失し、しかも労働の楽しさを存続させようとしても可能なはずがありません。

第二には、機械的大工業の発展と労働の技術的従属による働くことの味気なさが深刻化すること、これは社会体制のいかんを問わず、工業の発達にともなってある程度共通に現れる問題です。

そこで現代社会での行動のあり方、労働する人間の立場をあやまたず見抜く視座として、「物化」と「物神性」が重要であります。

(「物化」とは、人間のエネルギー、活動力が「物」として処理されること、まず商品として買われ、資本の運動の一要素として生産手段や生産材料と同じように「物」として処理されること、これはまさしく物化であり、近代的な人間疎外を決定づける鍵である。

「物神性」とは、もともと原始宗教で自然物に霊が宿ると信じ、この呪力によって人間の幸・不幸がもたらされると信ずる呪物崇拝を意味する。マルクスは商品経済の特殊な神秘的転倒性を明らかにするためこの語を用いた。人間と人間との関係が物と物との関係として現れることを示す。）

・マルクスにとっては、例えば制作としての対象化は、労働であって同時に遊ぶことでもあった、働くことと遊ぶことの織りなされた過程であるという把握がありました。この働くことと遊ぶこととの関連は哲学的に究明されねばならぬ重要なテーマとなりますが、物化・物神性を克服すべき私たちの地平に、個を主体とする対象化に対して、人間的連合の哲学を、しかもマルクスのものとして対地させたことは、未来に向かって解明されるべき多くの問題をも込めた重要な指針であると思われます。

**＜清水正徳「人間疎外論」から＞**

この本は、ヘーゲルからフォイエルバッハ、マルクスに至る過程で、自己疎外、労働の本質、宗教的疎外、類的存在などの諸相を鮮明にし、マルクスの疎外論の真髄に迫る力作である。

・「技術的疎外論」:多角的に疎外現象の分析をし、人間が目的ではなく手段とされていること、人間性・個性が失われていることなどの疎外があるとする見解。

　　⇕

・「社会的疎外論」：人間疎外がもともと人間の自己疎外であり、この自己疎外の基本構造の把握は、人間の相互関係の全体すなわち人間の社会的あり方のなかに明確にされるものだとする見解。

・著者は、「技術的疎外論」が人間性の尊重を謳い、「社会的疎外論」を完全に隠蔽することに成功していることに注目すべきであるという。

・疎外という概念を初めて学問的に用いたのはヘーゲルであるが、彼の哲学においてこの概念は、論理的には「外化」と同じことである。…マルクスがヘーゲル哲学の最も優れた点は彼が「労働の本質」を捉えていたことだとし、「精神現象論」全体の展開を労働=実践として把握しようとした「経済学・哲学手稿」が公にされて以来、これに触発されて疎外論の研究が進められてきた。

・ハイデッカーは、疎外ないし自己疎外の概念をサルトルのように自分の中心的な概念として用いることをしないが、「自己疎外論」を結節点としてマルクスと自分の哲学思想が厳しく噛み合うことを自覚していた。「故郷の喪失が世界の運命となる。それゆえにこの運命を存在史的に思惟することが大切である。マルクスが、ある本質的な深い意味において、ヘーゲルに沿って人間の自己疎外として洞察したところのものは、その根とともに近代的人間の故郷喪失にまで遡る。…マルクスは、自ら自己疎外を経験することを通して歴史の本質的な次元にまで沈潜したからこそ、歴史に関するマルクス主義的な見解は他の様々の歴史観に比べて卓抜しているのである。」

・本質と非本質、存在と非存在、神と自然、精神と物質、主観と客観等々を、それぞれ全く非連続的なものとして分かつというだけでなく、またこれらをただ連続的なものとして曖昧にしてしまうのでもなく、全く対立したものでありながら、しかも現実において統一されるべき運動・発展※を通してのみこれら相互の関連が初めて明確なものとなる、とするヘーゲルの基本的存在解明は、自己疎外論的思想構造の系譜としてみてもまさしく論理的な完成を示すものといえるであろう。いうまでもなく、存在・本質を神・精神・ロゴスとする立場に立った自己疎外論であり、存在は自己疎外し、自己回復することによって自らの存在・本質・神・精神であることを証しする(ヘーゲルの立場をP.30で著者はこのように記述している)。　※西田幾太郎の絶対矛盾的自己同一（相反するもの・ことが合一すること）と同じことを指していると思われる。

・ヘーゲルの自己疎外論へのフォイエルバッハの批判

①ヘーゲルの自己疎外論では、自己疎外の主体が普遍者(ロゴス=精神)であり、生きた個体としての人間でないこと。

②フォイエルバッハは、①を徹底的に批判し、自己疎外の主体を生きた人間とした。西洋2000年の伝統的哲学すなわち精神・理性・ロゴスの哲学を徹底的に否定する哲学をフォイエルバッハは打ち立てた。

③形相＊・ロゴス・神があるがゆえに質料、自然、人間があるのではなく、まさにその逆であるとフォイエルバッハはいう。　＊形相とは魂のこと。

・労働の疎外と言われる構造の全体を経済学的範疇の総体との相関において論理的に展開される本質は、労働を社会的生産としての形態づけ、絶えずこれを循環過程として自己運動体の現象たらしめている本質である。それは価値増殖過程、より具体的には資本蓄積過程の本質としての資本であり、抽象的に言えば自己増殖する価値である。…労働が「労働者に対して外的」であり、「労働者は彼の労働において自己を肯定しないで否定する。幸福でなく不幸を感ずる。…だから、労働者は、労働の外部で初めて自己のもとにあると感じ、労働のなかでは自己の外にあると感じる。…労働は、労働者自身の喪失である。」といって労働行為そのものの疎外を説いても、それは現実の資本主義的賃労働の概念的把握とはいえない。なぜなら、労働の人間にとって本質的な属性(使用価値の生産)を奪い取って、自己の増殖の過程のうちに包摂し、自己運動を展開する歴史的形態の本質(価値・剰余価値の生産――資本)を概念的展開の軸とすることによって、はじめて国民経済学的事実の全体を必然的発展の体系として捉えることができる、と思われるからである。

（以降、省略・・・難解な文章である）

**＜意見交換のテーマ＞**

１．科学的とは？

　マルクスとエンゲルスは、自分達の共産主義思想を科学的と呼び、フーリエたちを空想的と称して、厳しく批判した。人間の歴史は、階級闘争の歴史であり、最終的には労働者階級が階級闘争の勝利者となり共産主義の平等な社会を作り上げていくという法則を発見したことをもって、自分達の思想を科学的と根拠づけた。しかし、現実には理想的な共産主義社会は実現できておらず、共産主義思想そのものが破綻したともいわれている。

人類の歴史において、科学的とはどのようなものと考えるとよいか？

２．あるべき労働の姿とは？

　フーリエは、労働と遊びが融合した活動を理想の労働と考えていたが、マルクスも同様な考えをしていたとのことである。あるべき労働の姿とは、どのようなものであろうか？

（参考：西欧的労働観＝労働は生きるための手段であり労苦である）

＜キーワード＞

①自己実現

②疎外（労働生産物から、労働のやり甲斐から、類的存在から、人間性から）のないこと

③富の平等な分配

④財貨や物が必要なだけ得ることができること

⑤自由で創造的であること

⑥喜び、幸せ、楽しさ

３．労働とコンプライアンスとの関係

　フーリエは、理想的な共同体社会においては、窃盗や詐欺が消滅すると説いている。

理想の労働が実現できれば、コンプライアンスに貢献するであろうか？労働の種類やその質量によって、コンプライアンスに対する影響は変化するのであろうか？

以上

（参考）

・労働疎外論は、現代ではあまり議論されなくなったとのことである。高度にオートメ―ション化された産業社会、高度の情報化社会においては、産業革命時代とは産業構造や社会構造が異なっている。このため、労働のあり方も大きく変わってきており、同じベースで議論できなくなったという事情がある。